

大八車で岐阜から名古屋へ

父は復員後、国鉄(名古屋機関区)に復職した。結婚してから住んだ熱田区内田橋の家は戦災に遭い、家を探すことに。たまたま千種本町の鉄道(国鉄)官舎に空き家があり、幸運にもすぐに入居できることになった。

母は戦時中、名古屋から岐阜に疎開していた。夫婦二人で疎開先に預けていた荷物を名古屋の千種本町まで運ぶことに。洋服タンスなどの大物は、大八車を借りて運んだ。今は大八車を見かけなくなったが、幼い頃に見た記憶がある。大八車は百科辞典によると、江戸を中心に発達した荷物運送用の二輪車。大八なる人物がつくったといい、また8人の力に代わる意の代八車から転じたなどという。

『回顧録』から。「大八車での運搬は、生涯忘れ得ぬほどの難事であった。今から思ってもぞっとするぐらいだ。5月の終り近くで、日も長く、気候もよい季節であった。夕方出発し、翌朝には名古屋に着く予定であった。夫婦二人で勇んで出発した。当時は道も舗装でなかった。」

当時の岐阜と名古屋を結ぶ適当な地図が見つからないので、写真の『ライトマップル名古屋道路地図』から、二人が大八車で辿った道を振り返ってみよう。

赤く囲った岐阜市の「加野」を夕方に出発し、坂の道をやつとすることで長良橋に辿り着いた。岐阜の街を通り越した頃には、父は早くもグロッキー気味。母は元気であり、主力となって大八車を引く。



木曾川大橋に着いたのは、夜半の0時頃。なんとか一宮の真清田神社まで来たときは、父は半病人の状態だが、母はまだ元気。行程の半分も来ていない。神社前で2時間ほど寝て、疲労の回復を待つ。

一宮からは平たんな道で、やや元気を取り戻し一路、名古屋へと向かう。初夏の日の出は早い。稲沢を過ぎた頃、急に天候が悪くなり大雨に見舞われる。シートもなく荷物は濡れ放題。タンスに染みがつき、その後ずっと染みが残る。清洲あたりで兄が迎えに来てくれ、3人で交互に大八車を引いて、千種の鉄道官舎に着いたのは夕方近く。朝には着く予定が大幅に遅れる。荷物を片づけて、その晩はぐっすり寝る。翌朝は早めに起きて、借りた大八車を返さねばならず、二人で遠い岐阜へと向かう。枇杷島あたりまで来ると、また疲労を覚え出し、足がどうしても前に進まなくなる。母は元気であり、母が引く車に乗せてもらって進むことに。「体も足も自信があるはずだったが、如何ともできず、このことは一生の不覚であった。しかし妻の強いのに驚いた。女は強いと云うが、ほんとうにこの時だけはそう思った。」

(2017年9月18日)